

21

町医者について

医療の
小ネタ

いつも祖母に連れられて受診する、淋しい顔立ちの女の子がいます。この子の母親の育児放棄を見かねて、幼いときから祖母が面倒を見て来ました。おばあちゃんはもともと身体が弱いのに、生活のためにほとんど休まず働かなければなりません。

祖母は自分に残された時間がそんなに長くないことを、うすうす感じています。そして、自分がいなくなってしまうことを本当に心配しています。母と娘があまりに疎遠になってはいけなと、おばあちゃんはまだ若い母親（わが娘）の機嫌の良さそうなときを見はからって、二人が短時間でも一緒に過ごせるようにいろいろと考えるけれど、すぐに帰されてきて、その晩、女の子は決まって熱を出すのだそうです。

そんなある日のことです。めずらしく母親から女の子に「家においで」と電話がかかってきました。そんなことは初めてだったので、女の子はとても喜んで、となり町に住む母親のアパートに一人で出かけて行きました。祖母は気が気ではなく、しばらく時計ばかり見ていましたが、とうとう我慢できずに、どんな様子か確かめようと、娘のアパートのそばまで行ってみたそうです。そうしたら、女の子は道端にしゃがんで泣いていました。おばあちゃんは思わず駆け寄って抱きしめたそうです。

「来なければよかったね…」「うん…」

なんともせつない祖母と孫の帰り道の会話です。

町医者はそんな人たちの味方です。歯を食いしばって話を聞くことしかできなくても、辛さや、悲しさや、悔しさや、苦しさを分かち合う味方です。せつない人たちの味方でありつづける存在、それが町医者なのだと思います。